

優秀論文賞を受賞して

小学校通常学級における巡回相談による
軽度発達障害児等の教育実践への支援モデル
(『教育心理学研究』第54巻第3号)浜 谷 直 人
(首都大学東京)

このたびは名誉ある賞をいただきありがとうございます。この論文は、子どもと家族、学級担任・学校関係者、教育委員会の担当者、東京発達相談研究会のメンバー、研究室の院生など、沢山の方々の力で実現した実践をまとめたものです。関係する皆様に改めて感謝申し上げます。

自治体との長い関わりの中での実践

筆者は20年間ほど、Q市で統合保育の巡回相談員をしてきました。その縁で、教育委員会の方からも知己を得て、心障学級の教育に助力をほしいと依頼され、勉強のつもりで心障学級への相談を経験しました(芦澤・浜谷, 2004)。そのとき、発達障害などの教育では、通常学級での支援の必要性が高いことを痛感し、その制度化を教育委員会に訴えました。その要望を受けて相談が試行されたのですが、受賞論文で詳細に報告した事例は、その最初のケースです。

当時は、特別支援教育ということばが生まれる前で、先駆的な取組みでした。その後、Q市は東京都の特別支援教育モデル事業を受託し、巡回相談が本格実施され、多くのケースを担当しました。小学校の現場で起こっている実態を知ることになり、それを早く正確に伝えたいと思い、手早く概要をまとめて投稿しました。速報のような論文が賞をいただくとは、思いもよらないことでした。永年の現場との関わりの上での実践研究であることや、タイムリーであったことが評価していただけたのかと思うと特別な嬉しさがあります。

研究会の実践活動を基盤にして

この巡回相談のスタイルは、東京発達相談研究会が30

年近くにわたり保育園で実践したもの(東京発達相談研究会・浜谷, 2002; 浜谷, 2005)をベースにして、学校版として若干アレンジしたものです。その実施手順は、敷居が高いという特徴があります。教師が詳細な相談依頼書を作成すること、保護者の承諾を得ることなど、関係者間の合意形成を得ることや、相談対象児・周辺状況に関して整理して文章化することを経なければ相談依頼ができず、依頼から実施まで時間がかかります。現場からは、電話一本で来てくれる手軽な相談を求める声があるのですが、この手順を大切にするのは、それが、学校の教育力を高める働きがあるからです。

統合保育の巡回相談員として、研究会は、事例の状況の改善に寄与するだけでなく、園・保育者の保育力が長期的に構築することに寄与すること、さらには、その自治体の保育の質が発展することを重視して活動してきました。この論文の実践も、Q市の特別支援教育全体の発展に寄与することを意図したのですが、そこまでは論じることができませんでした。今後の課題です。

巡回相談実践の今後の交流を願って

特別支援教育が制度化され、現在、全国でさまざまな巡回相談が実施されているはずです。これはその中の一つのタイプに過ぎませんが、相談の心理学的な構造と実務的な手順を詳細に明示化し、この相談には強みだけでなく弱みもあることも示しました。一定の条件のケースに対しては有効でしたが、家庭での養育支援が必要なケースや学級内に複数の不安定な児童がいるようなケースでは、支援の効果は限定的でした。

さまざまなタイプの巡回相談が分析されて提示されれば、現在各地で試行錯誤しながら格闘している相談員の皆さんが、そのおかれた状況に応じて実践を構築する参考になるはずです。相談に優劣があるというよりは、その自治体の状況や子ども・学校の状況に応じて柔軟に相談のやり方が選ばれるべきだと思います。この論文がそのきっかけとなって、実践交流が活発になることを願っております。

引用文献

- 芦澤清音・浜谷直人 (2004). 中学校障害児学級への発達臨床コンサルテーションによる支援 特殊教育学研究, 42, 133-144.
- 浜谷直人 (2005). 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか—発達臨床コンサルテーションの支援モデル— 発達心理学研究, 16, 300-310.
- 東京発達相談研究会・浜谷直人(編著) (2002). 保育を支援する発達臨床コンサルテーション ミネルヴァ書房